

## 「初期白話文法群」における補語の記述について

### About Description of Complement in “Shoki Hakuwa Bumpougun (Grammars of Early Colloquial Chinese)”

田村 新

Arata TAMURA

Key words: 初期白話文法群 補語 助動詞 副詞

#### 1. はじめに

“My name is Sakura.” “This is me.” “I am happy.”はいずれも平成 29 年に告示された小学校学習指導要領の解説 p. 97 にて挙げられた例文である。これらの文の“Sakura” “me” “happy”はいずれも補語と呼ばれる文成分である。小学校学習指導要領の解説によれば、名詞、代名詞さらに形容詞が補語として用いられる文を扱い、中学校ではこれらに加えて原形不定詞が、高等学校では分詞が補語として用いられる文を扱うとしている。

一方で、中国語にも補語という文成分がある。中国語の補語は“你看完这本杂志了吗？”（あなたはこの雑誌を読み終えましたか。<sup>[1]</sup> 刘月华等 2019 : 535）、“忽然一条小狗向我跑来。”（突然子犬一匹が私に向かって走ってきた。 刘月华等 2019 : 546）の“看完”の“完”や“跑来”の“来”であり、“My name is Sakura.”を中国語にした“我叫樱花。”（私はさくらといいます。）もしくは、“我是樱花。”（私はさくらです。）の“樱花”は補語ではなく、目的語とされる。興水・島田は「補語とは、動詞（形容詞を含む）が表す動作行為の結果や状況を補足説明する成分である。英文法における補語とは異なるので混同してはならない」（興水・島田 2009 : 107）と述べている。

中国における文法学史の先行研究の一つである龔千炎 1997 は、中国における文法研究の草創期（以下草創期と略称する）の特徴はヨーロッパの文法研究の模倣にある（龔千炎 1997 : 3）としている。このことが事実であるならば、草創期には英語のような補語のみを補語として考えていたことになる。本稿では草創期の 1920 年代初

頭にいわゆる言文一致運動の中で出版された中国語の文法著作を初期白話文法群と呼ぶことにし、この初期白話文法群の補語に関する記述、ならびに現在中国語で補語とされるものに関する記述を手がかりにして、当時の中国人がヨーロッパの研究を模倣していたのか否かについて検討をしたい。

#### 2. 初期白話文法群と中国語の補語について

胡適が 1917 年に「文学改良芻議」を発表すると、それまで文言文によって書かれていた文章が、当時の話しことばである白話によって書かれるようになった。いわゆる言文一致運動であるが、この運動の中で 1920 年になると文言文ではなく白話を対象とした文法著作が数多く出版された。筆者が数えたところによれば、1920 年に呂雲彪らの手による《白話文做法》から 1924 年に黎錦熙によって書かれた《新著國語文法》までの四年間に 14 冊の白話を対象とした文法書が出版されている。本稿ではこれらの著作を「初期白話文法群」と呼ぶことにする。

本稿では初期白話文法群のうち、下記の著作の記述を本稿での考察の対象とする。

①呂雲彪・戴渭清・陸友白 1920《白話文做法》，上海太平洋學社。全 210 頁。②蔡曉舟 1920《國語組織法》，上海：泰東圖書局。全 101 頁。③陳浚介 1920《白話文文法綱要》，上海：商務印書館。全 73 頁。④李直 1920《語體文法》，上海：中華書局。全 91 頁。⑤馬繼楨 1920《國語典》，上海：泰東圖書局。全 152 頁。⑥楊樹達 1920《中國語法綱要》，上海：商務印書館。全 78 頁。⑦王應偉 1920-

21《實用國語文法》，上海：商務印書館。上卷全 194 頁＋下卷全 202 頁。⑧孫俚工 1920《中國語法講義》，上海：亞東圖書館。全 168 頁。⑨爾霖 1921《國語文法講義》，上海：中華書局。全 88 頁。⑩許地山 1921《語體文法大綱》，上海：中華書局。全 80 頁。⑪許慕義 1921《白話文法指南》，上海：廣益書局。全 95 頁。⑫黎錦熙 1924《新著國語文法》，上海：商務印書館。全 437 頁。

中国語の補語については興水・島田 2009 の分類に倣い、①結果補語②方向補語③可能補語④程度補語⑤数量補語⑥状態補語の 6 種類<sup>[2]</sup>を補語とする。そして、初期白話文法群が現在の中国語で補語とされる語をどのように記述したかを手がかりに、初期白話文法群が西洋文法を模倣したと言えるのかを考えたい。

### 3. 補語の定義について

それでは初期白話文法群は補語をどのように定義しているのだろうか。ここでは補語やそれに類する補足語などの用語に関する記述を手がかりに考察を行う。

呂雲彪らは補語を補足語と呼び、「補足語は語や句の中で意味を補足するのに用いられる。名詞や代名詞などからなる。」(呂雲彪 1920: 111) と定義している。呂雲彪らは“一隻紙鳶掛在電線上邊”(凧が電線上に引っかかっている。 呂雲彪 1920: 112)、“我寫信給朋友”(私は友人に手紙を書く。 呂雲彪 1920: 112)を補足語の例として挙げ、“電線上邊”(電線上に)と“給朋友”(友だちに)が補足語だと述べている。ここで興味深いのは“掛在”(～に引っかかる)という表現は動詞＋結果補語という形であるが、呂雲彪らはこれらを述語としている。このことから呂雲彪らは現在の補語と認識を異にしていることが窺われる。

陳浚介は自動詞について「自動詞は時として一字もしくは複数の字を下に加えることで、その自動詞の意味を完成させることができる。この一字もしくは複数の字を補足語と呼ぶ」(陳浚介 1920: 23) と述べている。陳浚介は補語を①名詞、②形容詞、③形容詞性のある動詞、④副詞、⑤節、⑥節にはなっていない語群の六種類とした。さらに、陳浚介は述語と副詞性修飾語の構造という章において、「動詞の意味が不完全である場合は、補足語を加えなければならない。」(陳浚介 1920: 59) と述べている。陳浚介は“我的兒子已經成了一個好學生。”(私の息子はすでに一人のよい学生になった。 陳浚介 1920: 59) という例文を挙げ、“成了”は自動詞で意味が不完全だ(陳浚介 1920: 59) と述べている。“成了”(なった)という語のみでは何になったのか意味が不完全なので、“一個好

學生”(一人のよい学生)を補足語として意味を補ったというのだ。さらに、「主となる他動詞には目的語や補足語が必要となる。」(陳浚介 1920: 60) と述べている。“他們看見這疲乏的人睡着了。”(彼らはこの疲れた人が寝入っているのを目にした。 陳浚介 1920: 60) という例をあげ、“看見”が主となる他動詞で“這疲乏的人”が目的語、“睡着了”が補足語である。」と述べている。“這疲乏的人”(この疲れた人)という目的語に対し、この人がどうなったのかというのを補足語として“睡着了”(寝入っている)を補ったというのだ。“看見”も“睡着”もいずれも現在の中国語では動詞に結果補語のついた形であるが、陳浚介は一方を動詞と考え、一方を補足語の一部としている。つまり、陳浚介は語としての構成ではなく、語が文の中でどのような働きをしているのかという点で、この二つの結果補語を区別しているのだと思われる。

李直は主格となることのできる名詞や代名詞について述べる中で、補足語について触れている。李直は「補足語は自動詞の後にある。補足語と主語と同じ内容を指すため、補足語も主格なのである。」(李直 1920: 68) と述べ、“大總統是徐世昌”(大総統は徐世昌だ。)、 “寫字的人是他”(字を書いているのは彼だ。)、 “這是大家不奮鬪”(これは皆が努力をしないことだ。 いずれも李直 1920: 68) という例を挙げ、“徐世昌”“他”“不奮鬪”が補足語だとしている。この例文で述語となる動詞は全て“是”である。この“是”は目的語が名詞性のものである時、英語の be 動詞とよく似た文を作るのに用いられる。このようなことから、李直の補足語は英語の補語と同じと考えて差し支えないのではないだろうか。

馬繼楨は「いくつかの自動詞は必ず補足語(場所や時間を表す名詞は補足語と呼ばれる)を加えることで、文として成り立つ。」(馬繼楨 1920: 25) と述べている。馬繼楨は“學生在學校。”(学生は学校にいる。)、 “我到上海。”(私は上海に着く。)、 “他往北京去。”(彼は北京へ行く。)、 “今天要出門”(今日出かけなければならない。 いずれも馬繼楨 1920: 25) という例文を挙げ、“學校”“上海”“北京”“門”が補足語だと述べており、李直のようには考えていないようである。

楊樹達も「補足」という語を使用しているが、これまで見てきた人達と様相が異なる。楊樹達は形容詞の用法を説明する中で「形容詞は名詞の前で使われる場合と名詞の後で使われる場合がある。名詞の前で使われる場合を形容詞の修飾用法とよび、名詞の下で使われる場合を形容詞の補足用法と呼ぶ。」(楊樹達 1920: 49) と述べている。そして、“他的聲名很大。”(彼の名声は大きい。

楊樹達 1920 : 49) “這花是很美麗的”(この花は美しい。楊樹達 1920 : 49) という例を挙げている。つまり、楊樹達のいう形容詞の補足用法とは形容詞述語文<sup>[3]</sup>を指しているのである。呂雲彪以来の補足語の意味では、楊樹達は使用していない。

孫俚工は文成分を説明する中で「足詞または補足語と呼ぶが、動詞の後に目的語を伴いながらも、意味が不足する際に、補足語を加える。」(孫俚工 1921 : 10) と述べている。孫俚工は“他做工很苦。”(彼は苦しく仕事をする。)、 “他買筆送我。”(彼は私に送る筆を買った。 いずれも孫俚工 1921 : 11) などの例を挙げ、“很苦”“送我”が補足語だとしているのである。“做工”(仕事をする) や“買筆”(筆を買う) だけでは意味に不足を感じ“很苦”(苦しい) や“送我”(私に送る) という補足語をつけたというのだ。

爾霖は文成分の一つに、足詞という文成分を立てている。そして、その足詞を「動詞の意味を補足するものである」(爾霖 1921 : 51) と定義している。動詞の意味を補足するというと現代中国語の補語の様に思われるが、爾霖の挙げた例文を見ると“他是學生。”(彼は学生である。爾霖 1921 : 51) というもので、実際には英語の補語と同じように考えていたことが想像される。

黎錦熙は補足語について、「補足語は同動詞<sup>[4]</sup>の文で主語がどのようなものなのか、どのような状況なのか、また、どのような種類のものなのかということの説明するものである。同動詞の補足語となるのは大多数が実体詞である。」(黎錦熙 1924 : 16) と述べている。実体詞とは名詞や代名詞を指す。黎錦熙のいう補足語も英語の補語と同じである。

初期白話文法群の補足語の定義を見てきたが、ほとんどのものは英語の補語と同じように考えていたようだ。この点は、初期白話文法群が英語文法の影響を受けたといえないこともないように思われる。しかしながら、楊樹達は形容詞述語文の事を補足用法としていた。陳浚介も結果補語の一部を補足語とするなど、人による差があった。

#### 4. 各種補語についての記述

初期白話文法群の補足語は英語文法の影響を受けていたようであった。それでは現在の中国語で補語とされるものを初期白話文法群はどのように捉えていたのだろうか。

#### 4.1. 結果補語

結果補語は“孩子们看见我来了，都非常高兴。”(子どもたちは私がきたのが見えると、みんな非常に喜んだ。刘月华等 2019 : 539) の“見”で、動詞“看”の後につき動作をした結果を表すものである。初期白話文法群は結果補語をどのように記述してきたのだろうか。

呂雲彪らは自動詞の説明の中で“你能够跳到這樣高，我也能够跳到這樣高。”(あなたはこのような高さまで飛ぶことができ、私もこのような高さまで飛ぶことができる。呂雲彪ら 1920 : 75) という例を挙げている。“到”は結果補語だが、この例文での説明は“跳”という自動詞であり、この動詞に続く結果補語の“到”についての説明はない。呂雲彪らはこのほかに結果補語を使用した例を挙げておらず、彼らの中で結果補語をどのように考えていたのか分からない。

蔡曉舟は接続詞の説明の中で、自動詞の後に用いられる接続詞として、蔡曉舟 1920 : 38 において“于”“在”を挙げ“他坐在屋裏。”(彼は部屋で座っている。)、 “他坐于屋裏”(彼は部屋で座っている。)、 “你站于門外”(あなたは戸の外で立っている。)、 “你站在門外”(あなたは戸の外で立っている。 いずれも蔡曉舟 1920 : 38) をその例として示している。自動詞は本来目的語を取ることのできない動詞である。しかし、蔡曉舟は“于”“在”を使用する事で自動詞に目的語を取ることができると考えたのである。蔡曉舟は文章記号の一つ「一」(ダッシュ)の説明で“聽的人把正陽門外大路都堵住了(後略)” (聞いている人は正陽門前の大通りに立って塞いでいる。 蔡曉舟 1920 : 81) という例を挙げている。しかしながら、ハイフンの使い方の説明での例であり、結果補語“住”の説明はない。蔡曉舟はこのほかに結果補語を用いた例文を挙げてはいない。蔡曉舟は“在”<sup>[5]</sup>については自動詞と目的語を結びつける接続詞と考えていたようであるが、このほかの結果補語については用例がないため窺い知ることができない。

陳浚介は3節において前述したが、“他們看見這疲乏的人睡着了。”(彼らはこの疲れた人が寝入っているのを目にした。 陳浚介 1920 : 60) という例をあげ、「“看見”が主となる他動詞で“這疲乏的人”が目的語、“睡着了”が補足語である。」と述べていた。このほかの結果補語はどのように記述しているのだろうか。陳浚介は“好些日子我沒有看見你了。”(ずいぶん長いことあなたに会えなかった。陳浚介 1920 : 18) のように例文の中で結果補語を使用しているが、結果補語そのものについての説明はない。現在の介詞に当たる助詞を説明する中で、場所を表す助詞

として“在”をあげ、“他坐在椅子上。”(彼は椅子に座っている。 陳浚介 1920 : 46) のような例を挙げている。これ以外の場所では結果補語をどのように考えているのか説明がないため、陳浚介が結果補語をどのように考えていたのかこれ以上窺い知ることができない。しかしながら、結果補語の一部を助詞(介詞)として考えていた可能性がみうけられた<sup>[6]</sup>。

李直は品詞を説明する中で、「“聽懂”(動詞)」(李直 1920 : 2) と述べている。李直は動詞と結果補語を合わせて動詞と考えたのだ。一方で、李直は助動詞の説明の中で「動詞の中にはしばしば別の語がつく。これらの動詞の後ろにつく語も助動詞と呼べるが、実際には副詞或いは介詞であるが、まるで一つの動詞のようになっているのだ。」(李直 1920 : 29) と述べている。その例として、“他說到這話。”(彼はこの話まで話した。 李直 1920 : 29) があり、その説明として、「“到”は介詞である。」(李直 1920 : 29) と述べている。この例の中には“他從牀上起來”(彼はベッドから起き上がった。)、 “他向山頭走上”(彼は山頂に向かって登っていった。 いずれも李直 1920 : 29) という例を挙げている。方向補語も助動詞と考え、一つの動詞のようになっていると考えたのだ。

馬繼楨はいくつかの結果補語を副詞で扱っている。“着”“住”“見”(馬繼楨 1920 : 51) が決定を表す副詞で、“完”“成”(馬繼楨 1920 : 53) が方向を表す副詞で紹介されている。一方で馬繼楨は文を成立させる成分の中で、“我的錢花完了”(私のお金は使い終わった。 馬繼楨 1920 : 90)、“這個賊被巡警捉住了”(その泥棒は警官に捕まえられた。 馬繼楨 1920 : 92) という例を挙げているが、“花完”“捉住”のいずれも述語としているが、結果補語の“完”“住”については言及がない。

楊樹達は指示代名詞について述べた箇所“事情被他弄壞了,這(這個)真可惜。”(仕事が彼をおかしくした。このことは本当に惜しいことだ。 楊樹達 1920 : 21) という例を挙げている。“壞”という結果補語が使われているが、“壞”がどのような働きをしているかについては言及がない。楊樹達は結果補語を使用した例文をこのほかに6つ挙げているが、いずれも結果補語についての説明はない。

王應偉は二重目的語の説明で、“雇主把工食銀付給僕役”(雇い主は食事代を下男に渡した。 王應偉 1920 : 上編第3編 52) という例文から、「“工食銀”は動詞“付給”に対する一つ目の目的語で、“僕役”は二つ目の目的語である。」(王應偉 1920 : 上編第3編 52) と述べ、さらに、「多くの他動詞に“給”をつけ“贈給”“賞給”のようにし、複合動

詞を構成する。」(王應偉 1920 : 上編第3編 53) と述べている。結果補語“給”は複合動詞を作るものだと考えたのだ。このほかに王應偉は結果補語を使用した例として“留在這裏”(ここに留まる。 王應偉 1920 : 上編第1編 31) という例を挙げているが、結果補語の“在”について特に言及はされていない。

孫俚工は名詞が目的語として使われる例を説明する中で“他住在上海。”(彼は上海に住んでいる。 孫俚工 1921 : 30) という例を挙げ「この“上海”は“在”の目的語となっている。」(孫俚工 1921 : 30) と述べている。“住”との関わりについては触れていないので、“在”を補語としてか、または別の動詞として扱っているのかは不明である。また、動詞の説明の中で“(前略)打破了當時的沈寂”(その時の静寂を打ち壊した。 孫俚工 1921 : 45) という例をあげ、また、他動詞として“我聽見他笑。”(彼が笑うのが聞こえた。 孫俚工 1921 : 71), さらに“錢我花完了。”(お金を私は使い終えた。 孫俚工 1921 : 72) という例をあげている。“聽見”“花完”を動詞としてひとくくりしている。一方で、孫俚工は『紅樓夢』から、“站在山坡背後”(山の斜面を後にして立つ 孫俚工 1921 : 160) という文を述語に介詞が伴われる例として挙げている。“站”という動詞に介詞句“在山坡背後”が着いたと説明しているのである。孫俚工の記述を見るかぎり、結果補語について、見解が一つにまとめられているわけではないようだ。

爾霖は述語となる語の説明の中で、「複音節動詞が述語となる時、その動詞の表現力は増し加わる。」(爾霖 1921 : 56) とのべ、その例として方向補語“跑—跑上—跑上去”(駆ける—駆け上がる—駆け上がっていく)の例と共に、“走—走開—走開去”<sup>[7]</sup>(去る—立ち去る—立ち去っていく)という例を挙げている。爾霖は単音節の動詞“走”は表現力が乏しいため結果補語の“開”をつけ二音節動詞にし、さらに方向補語の“去”をつけ三音節動詞にし、さらに表現力を増したとしているのだ。このほかにも結果補語を使った例は挙げられているが、それらの結果補語の説明については特にされていない。爾霖は結果補語を動詞の一部と考えたようだ。

許地山は代名詞の説明で“李四很明白甚麼叫做優生主義。”(李四は何を優生主義というのかよく分かっている。許地山 1921 : 21) という結果補語を使用した例を挙げている。しかし、結果補語がどのようなものかについては述べていない。

許慕義は副詞についての説明で“拿開了罷”(取りのけなさい。 許慕義 1921 : 下編 16) また、“書讀完了。”(本

を読み終えた。許慕義 1921 : 下編 17) という例を挙げている。数は少ないので断定できないが、許慕義は結果補語を副詞と考えているように思われる。

黎錦熙は他動詞の説明の中で“陽貨送給孔夫子一盤肘子”（陽貨は孔子に豚のもも肉を一皿送った。黎錦熙 1924 : 124）という例をあげ、この例に対し「この“送給”の“給”は介詞である。しかし、元々これは動詞で、この字の上にさらに“送”の字をつけることで、同義語或いは二つの語の意味が合わさった複合語を構成する。」（黎錦熙 1924 : 124）と述べている。つまり、結果補語“給”を加えることで「あげる」という意味を持つ合成語を作っているのである。また、一方で黎錦熙は過去を表す副詞として“完”を紹介し、“功課業已做完了。”（宿題はすでにやり終えました。黎錦熙 1924 : 167）という例を挙げている。また、結果補語として使われる“在”については場所を表す介詞で“（前略）有的站在椅子上，有的躺在地板上，（後略）”（あるものは椅子に立っていて、あるものは床に寝そべっていて、黎錦熙 1924 : 198）という例をあげ、「自動詞のうち、“坐”“站”“休息”“掉”などは動作があまりないか、ほとんど動きがない。（中略）動きがあまりない自動詞は介詞“在”を動詞の前もしくは後につけることで動作の場所を表す」（黎錦熙 1924 : 199）と述べている。黎錦熙は結果補語について何か一つのものとするよりは、個別の語がどのように使われているかという分析をしたようである。

初期白話文法群が結果補語をどのように記述してきたのかを見た。結果補語を例文で用いているが、結果補語に特に言及がないものが多かった。しかし、僅かな説明を頼りにうかがい知ることができた事として、動詞と結果補語が結びつくことで単語として捉えたもの、介詞として記述したもの、助動詞の一種と考えたものとあったようだ。一つの考えに固定化されておらず、人による差があるのだ。

#### 4.2. 方向補語

方向補語は“他向我走过来。”（彼は私の方に歩いてきた。刘月华等 2019 : 544）の“过来”で、動作の行われる方向を表す補語をさす。また、“请你把门关上。”（ドアをしっかりとしめて下さい。刘月华等 2019 : 547）の“上”のように、本来の方向義から派生した用法も存在する。このような方向補語を初期白話文法群はどのように記述してきたのだろうか。

呂雲彪らは自動詞の例として“進去”（呂雲彪ら 1920 : 75）を挙げ、“你先進去，我待一刻來。”（先に入ってい

って、私は少ししてから行くので。）、“快快進去看做把戲。”（早く入って行って曲芸を見よう。いずれも呂雲彪ら 1920 : 76）という例を挙げている。さらに呂雲彪らは文についての記述で“可憐的馬兒，被那馬夫拿起鞭來，（後略）”（かわいそうな馬は、あの馬引きに鞭を持たれ、（後略）呂雲彪ら 1920 : 122）の様な複合方向補語の派生の用法の例がある。しかしながら、例として挙げられているばかりで、詳細な説明はない。用例が少ないので動詞と方向補語を合わせて一つの動詞として考えていたと断定はできないだろう。

蔡曉舟は「熟語となる動詞」という節で次のように述べている。

動詞と配合字には二種類ある。一種類目は“出來”“進去”“拿起來”“吃下去”のようなものである。これら配合字と動詞とは同義語ではないが、組み合わせることで一つの動作を表すことができ、熟語となせるのである。（後略）（蔡曉舟 1920 : 18-19）

蔡曉舟は動詞“出”“進”“拿”“吃”に配合字“來”“去”“起來”“下去”をつけることで別の熟語を作っている。方向補語という用語は使用していないが、方向補語となるこれらの配合字に別の意味を作る特殊な語という認識はあったようだ。

陳浚介は補足語の説明で、“我們希望的是時價跌下來。”（私たちが期待するのは時価が下落することだ。陳浚介 1920 : 23）のように述べており、“跌下來”が補足語であると述べている。陳浚介は現在の介詞である助詞の説明で、“他已經走上樓梯了”（彼はすでに階段を上っていた。陳浚介 1920 : 46）という例を挙げている。同じ介詞“上”の例として“你上那兒去？”（あなたはどこへ行くの。陳浚介 1920 : 46）という例を挙げている。つまり、方向補語と介詞を区別していないのである。陳浚介は名詞の説明の中で“太陽升上來了，他射出的光很亮。”（太陽が昇ってきて、太陽が放つ光が明るい。陳浚介 1920 : 6）のような方向補語を使用した文を例文としてあげている。また、動詞の説明で“你給我抄下一頁字來。”（私に字を一頁分書き残して下さい。陳浚介 1920 : 31）というように派生の用法も例として挙げている。方向補語についての説明がないので、陳浚介が現在の方向補語のような認識をどこまでしていたのかははっきりとしたことは分からない。

李直は結果補語でも述べたが、方向補語は助動詞の一種として考えており、副詞もしくは介詞が助動詞として

使用されていると述べている。(李直 1920 : 29)

馬繼楨は方向を表す副詞の中で“起”“來”“起來”“過來”“去”“下去”を例として挙げている。例えば，“你把茶壺提過來。”(急須を持ってきて。馬繼楨 1920 : 52) の様な例を挙げている。しかしながらこのほかの方向補語として用いられる“上”“進”“出”などは方向を表す副詞としてあげられていないので、方向補語を副詞と考えたと断定はしがたい。

楊樹達は自動詞を説明する中で，“黑雲散了，太陽也出來了。”(黒い雲が散って，太陽も出てきた。楊樹達 1920 : 30) という方向補語を例文で使用している。楊樹達は“散”と“出來”を自動詞としている。このことから、楊樹達は方向補語を動詞の一部に含めているということが考えられる。しかしながら、このほかにも3つの例文で方向補語が使われているが、方向補語については特に言及がないので、実際にどのように考えていたのかは断定しがたい。

王應偉は時を表す助動詞の中でアスペクト助詞の“過”“了”とともに、方向補語“來”“去”“出來”“起來”“上來”“下來”“上去”“下去”をその例として挙げ、次のように述べている。

“來”“去”“出來”“起來”“上來”“下來”“上去”“下去”はみな動作行為が始まる意味を含む(中略)“來”という助動詞は遠くから近くへという意味があり，“去”という助動詞は近くから遠くへという意味がある。(王應偉 1920 : 上編第1篇 38)

王應偉は方向補語を助動詞として考えたようだ。

孫俚工は動詞の例として，“太陽出來了。”(太陽が出てきた。孫俚工 1921 : 3)、“我打亭子邊走過。”(私はあずまやから歩いてきた。孫俚工 1921 : 48) という例を挙げているが，“出來”も“走過”も動詞としている。孫俚工は動詞の説明の中で次のように述べている。

“來”“去”はほかの動詞(もしくは副詞をさらに連ねたもの)の後につけ、離れたり着いたりする複音節動詞を作ることができる。(中略)これらの文の中にある“舉起來”“放下去”“走進來”“走出去”は複音節動詞だが、これらは次のようにいう事もある。“他舉起那個千斤石來”(彼はあの1000斤の石を持ち上げた。)  
“他放下那枝筆去”(彼はあの筆を置いた。)  
“他走進學校來”(彼は学校に入ってきた。)  
“他走出門去”(彼は門を出て行った。)(孫俚工 1921 : 68)

孫俚工は“舉起來”が“他把那個千斤石舉起來”という事もあれば，“他舉起那個千斤石來”(下線は本稿執筆による)のように“舉起”と“來”が付いたり離れたりすると述べているのである。孫俚工は方向補語“來”“去”は動詞と考えたのに対し，“起”“下”などの方向補語は副詞と考えているようである。

爾霖は前述したが、「複音節動詞が述語となる時、その動詞の表現力は増し加わる。」(爾霖 1921 : 56) と述べ、結果補語の例と共に，“跑一跑上一跑上去”(駆ける一駆け上がる一駆け上がっていく)という例を挙げている。また、動詞が補足語となる事を説明する中で「動詞と補助動詞の後に“來”や“去”の字が加わると、動詞の目的や作用、方向の意味が加わる」(爾霖 1921 : 64) と述べ、“提起筆來寫字。”(筆を取って字を書く)，“放下筆去讀書。”(筆を置いて本を読む)という例を挙げている。爾霖は方向補語という用語は使用してはいないが、方向補語の持つ働きについて言及したのである。

許地山は助動詞の説明で、動詞のあとに助動詞が来ることがあり，“你就照這樣做下去罷。”(このように世話をしていきなさい。許地山 1921 : 28) をその例として挙げている。許地山は方向補語“下去”を助動詞として考えたのだ。しかし、これ以外に方向補語を使用した例文で説明がないため、断定はできない。

許慕義は当然を表す助動詞の例文に“你應該回去了。”(あなたは帰らなければならない。許慕義 1921 : 上編 44) 過去を表す助動詞で“聽了戲回來。”(京劇を見て帰ってくる。許慕義 1921 : 上編 45) と方向補語を使った例文を挙げている。しかしながら、助動詞“應該”“了”の説明であり、方向補語の説明はない。

黎錦熙は方向補語について、自動詞の中で「通常自動詞“來”“去”は外の動詞や複合動詞と共に使われる。そして、場所を表す語を伴う」(黎錦熙 1924 : 127-128) と述べている。方向補語として“來”“去”が動作の方向を表すとはしていないが、動作の向かう場所を表す語を伴うと述べているのである。また、方向補語の派生の用法については、後につける助動詞の中で方向補語を扱っている。そして，“大家唱起來吧！”(皆さん歌いましょう！黎錦熙 1924 : 145) などの例を挙げている。

方向補語について初期白話文法群がどのように記述してきたのかを見た。結果補語と同様に用例全てに説明があるわけではないので、断定し難いところがあるのは否めない。しかしながら、助動詞と考えたり、動詞と考えたり、また副詞と考えたりで、考え方には差が見られた。

### 4.3. 可能補語

可能補語は“他的话你听得懂吗？”（彼の話あなたには聞いて理解できましたか。 刘月华等 2019 : 582）の“听得懂”で、可能や不可能を表す補語である。では、初期白話文法群は可能補語をどのように記述してきたのであろうか。

呂雲彪らは接続詞の記述で“沒有學問的人，就是得志也靠不住的。”（学問のない人は、志を持っていても信用できない。 呂雲彪ら 1920 : 102）という例文を挙げている。ここでは“就是”について説明するのみで、可能補語“靠不住”の説明はない。このほかにも呂雲彪らは可能補語を使用した例文を3つ挙げているが、いずれも可能補語自体についての言及がないので、可能補語をどのように捉えているか窺い知ることができない。

陳浚介は“的”について“你看的明白嗎？”（あなたは見て理解できますか。 陳浚介 1920 : 50）という例をあげ、「動詞が副詞として使われており、“得”と同じ意味である。」（陳浚介 1920 : 50）と述べている。ただ、陳浚介は“看的明白”に可能の意味があるとは言及していない。

王應偉は単文の単語の並べ方を説明する中で、“那件事這少年人辦不了”（あの事はこの少年には処理しきれない。王應偉 1920 : 上編第3篇 82）という例の中で“辦不了”を述語としている。このことから考えると王應偉は“辦不了”を一つの語として考えていたようだ。王應偉はこのほかにも“大約過得去了。”（おおかた通り過ぎることができた。王應偉 1920 : 上編第1篇 50）のような例を挙げているが、特に説明はない。このため、可能補語を一つの語と考えていたかについては断定出来ない。

孫俚工は“我們底衣，食，住，都是勞工底汗換得來的。”（私たちの衣、食、住は全て労働者の汗によってえることができた。 孫俚工 1921 : 6）“汽車快得馬都趕不上。”（車は馬が追いつけないくらいに速い。 孫俚工 1921 : 12）という例の中で可能補語が使われている。しかし、可能補語そのものの説明はない。

爾霖は述語の持つ語気について述べた節で“我終找不着他了。”（私は結局のところ彼を見つけられなかった。爾霖 1921 : 59）という例を挙げている。しかしながら、可能補語の“找不着”がどのような物であるのかについては説明がされていない。

許地山は動詞の後にくる助動詞の説明の中で“這地方是站不住底。”（この場所ではしっかりと立てない。）という例を挙げている。方向補語で述べたが、この可能補語の例文と同じ場所で許地山は方向補語を使用した例も挙げている。つまり、許地山は可能補語と方向補語を同

じ助動詞の一種と考えていた可能性があるのである。

許慕義は憤りを表す感嘆詞として“哼！你對得起我麼？”（フン！期待に背かないと思っているのか。 許慕義 1921 : 下編 36）という例を挙げているが、可能補語についての説明はない。

黎錦熙は状態補語を作る“得”の説明の中で「“得”によってつけられた副詞は単純な程度や状態を表すばかりではなく、可能の意味を表すことがある。」（黎錦熙 1924 : 240）と述べ“這件事，你辦得了。我可辦不了。”（この件は、あなたにはできるだろうが、私にはできない。）という用例を挙げている。可能補語の持つ可能の意味について言及しているが、黎錦熙は可能補語を副詞と考えたのである。

可能補語を初期白話文法群がどのように記述してきたのかを見てきた。助動詞と考えるものがあったり、副詞と考えた箇所も見られたが、可能補語が使用されている例文一つ一つの用例に対して説明がされていないため、実態を断言することはできなかった。余談ながら蔡曉舟、李直、馬繼楨に至っては可能補語を使用した例文すらなかった。

### 4.4. 程度補語

程度補語は“今天红红高兴得很。”（今日ホンホンはとても嬉しそうだ。 刘月华等 2019 : 629）や“这本书好极了。”（この本はすばらしい。 刘月华等 2019 : 630）で使用されている“得很”“极了”を指し、程度が高いことを表す補語である。この程度補語を初期白話文法群はどのように記述しているのだろうか。

呂雲彪らは疑問代名詞<sup>[8]</sup>“為什麼”（どうして）について、“臉上骯髒得很，為什麼不洗洗。”（顔が酷く汚れているけど、どうして洗わないの。 呂雲彪ら 1920 : 95）という例を挙げている。しかし、程度補語の“得很”については言及がないため、程度副詞をどのように考えていたかは不明である。

蔡曉舟は副加詞<sup>[9]</sup>の「形容詞の前或いは後の副加詞」という節で“這樣好極了（ママ）。”（このようにするのは極めてよい。）、“巴黎是繁華得很。”（パリは非常に賑やかである。 いずれも蔡曉舟 1920 : 26）という例文を挙げている。蔡曉舟は“得很”ならびに“極了”が形容詞の後ろにつく副加詞で、形容詞の程度を表すと考えたのである。蔡曉舟は現在の程度補語と同じように考えていたと言えるだろう。

陳浚介は特別な副詞として、“極了”“得很”“得利害”“多了”“得多”という例語を示し、“學校園裏的梅花好看極了。”

(学校の庭の梅の花は実に美しい。)、*“這件東西貴得很。”*  
 (これはとても高い。)、*“今天冷得利害。”* (今日は酷く寒い。)、*“今天比昨天暖和多了。”* (今日は昨日よりずっと暖かい。)、*“你寫字比他寫字快得多。”* (あなたが字を書くより彼が字を書く方がずっと速い。 いずれも陳浚介 1920:43) のような例文を示している。*“極了”* *“得很”* *“得利害”* については「これらの語はいずれも比較の意味を持たない。」(陳浚介 1920:43) とし、*“多了”* *“得多”* については「これらの語はいずれも比較の意味を持つ。」(陳浚介 1920:44) と述べている。これは*“多了”* *“得多”* は上述の例文*“今天比昨天暖和多了。”* のような比較の文で使用するのだと述べているのである。陳浚介は程度補語について程度を表す副詞と考えていた。

馬繼楨は比較の副詞の中で*“極”* という語を挙げ、*“好極了。”* (すばらしい。 馬繼楨 1920:44) という例を挙げている。しかし、馬繼楨は*“極”* と同じく比較の副詞として取り上げている*“很”* について、*“今年的莊稼, 收成很好。”* (今年の農作物は出来がよい。 馬繼楨 1920:44) という例を挙げている。*“很”* は程度補語の例ではないのである。馬繼楨が比較の副詞として程度補語を考えていたと結論づけるには資料が乏しい。

王應偉は副詞の中で*“這病是重得很。”* (この病気はとても重い。王應偉 1920:上編第1篇42) という例を挙げ、*“很”* は助動詞*“得”* の後にある例(王應偉 1920:上編第1篇42) と説明をしている。また、原因と結果を表す接続詞の例として、*“中國簡直是沒有進步; 為何呢? 一般人心, 實在壞得很。”* (中国は全く進歩をしていないが、どうしてか。普通の人の心が実は酷く壊れているからだ。王應偉 1920:上編第1篇69) という例を挙げている。しかし、程度副詞については言及がされていない。王應偉は程度補語をつくる*“得”* については助動詞として考えたが、程度補語そのものをどのように考えたのかについては不明である。

孫俚工は文中で動詞がどの位置に置かれるか説明する中で、「自動詞の後に*“得”* があり、その後副詞をつけ、主語—動詞(得)—副詞。という語順になる。」(孫俚工 1921:73) と述べ、*“他急得要死。”* (彼は非常に焦っていた。 孫俚工 1921:73) という例を状態補語の例と共に用いている。状態補語を程度補語と同じように考えていた様である。

爾霖は「共通語を考える際に注意すべき事」として次のように述べている。

今提唱されている国語は、共通語<sup>[10]</sup>を骨格とし

て使うが、共通語の中にもいくつかの種類の語がある。我々がその語を選定する時には皆がよく使っているとか、使用する意義のある言葉だとかということ を考慮すべきである。例えば、*“很好”* は時に*“好極了”* とか *“很不錯”* *“真不推版”* *“竟不歹”* などとも言う。…しかし、これらの中で*“很好”* を使うべきだ。それは最も普通に使われており、地方色がないからだ。」(爾霖 1921:38)

爾霖は「よい」という意味の*“很好”* の別の言い方として、*“好極了”* があると述べている。ただ、この言葉を程度補語として考えていたかは不明である。いずれにせよ、*“很好”* と *“好極了”* が同義だと考えていたようである。程度補語について爾霖はこれ以外に例としても示していない。

許地山は程度補語を使用した例として*“我對於那天底事實在失敬得很”* (私はあの日のことについて、本当に失礼をしました。 許地山 1921:39) を挙げている。また、形容詞の後に置かれる副詞について*“前山襯着落日, 更覺紅得可憐。”* (前の山に落日が映えて、さらに非常に赤く感じる。 許地山 1921:39) という例を挙げている。ただ、程度補語を使用したというだけで、程度補語についての説明はされていない。許地山がどのように考えていたのかについてはこれ以上窺い知ることができない。

許慕義は副詞が使われる場所について述べている中で、*“病重得多了。”* (病気が非常に重い。 許慕義 1921:下編16) と例を挙げ、*“多”* については「副詞で、助動詞*“得”* の後に位置する。」と述べている。また許慕義は*“這是好極了。”* (これは極めて良い。 許慕義 1921:下編17) と例を挙げ、*“極”* について「副詞で形容詞*“好”* の後に来る。」(許慕義 1921:下編17) と述べている。許慕義も程度補語は副詞として考えていたようだ。

黎錦熙は程度を表す副詞の中で直接修飾語を被修飾語につける例として*“這個辦法妙極了。”* (この方法は極めて巧妙だ。 黎錦熙 1924:187) という例を挙げている。さらに黎錦熙は*“得”* の字を使うことで被修飾語と繋げる副詞として、*“他的病沈重得很。”* (彼の病気が酷く重い。 黎錦熙 1924:187) という例を挙げている。黎錦熙は程度補語について程度を表す副詞と考えたようだ。

初期白話文法群が程度補語をどのように記述しているかを見てきた。程度補語に言及しているものは少ないが、記述を見ると初期白話文法群では程度補語を副詞と考えていたようで概ね見解は一致していたようだ。



#### 4.5. 数量補語

数量補語は“这本书你看过几遍了？”（この本をあなたは何度読んだことがありますか。 刘月华等 2019:611）の“几遍”で動作や行為などの数量を表すものをさす。では、初期白話文法群は数量補語をどのように記述しているだろうか。

呂雲彪らは接続詞や副詞の連用について述べる中で“打今天算起，纔剩了十天。”（今日から数えて，たった十日間しかない。 呂雲彪ら 1920:118）という例を挙げている。しかし，“十天”については言及がないので，数量補語をどのように考えていたのかについては分からない。

陳浚介は疑問を表す副詞として“幾”を紹介し，“你到過蘇州幾回？”（あなたは蘇州に何回行ったことがありますか。 陳浚介 1920:44）という文で，数量補語を使用している。さらに，「文で主となる他動詞が目的語や補足語を必要とする」例として，「副詞的目的語」で，数量補語を使用した例を挙げている。その例文は“他走了十里路了。”（彼は10里の道のりを歩いた。 陳浚介 1920:60）というものである。これらを見ると，陳浚介は数量補語を副詞の一部と見なしていたように思われる。

李直は副詞の一種である数量副詞の例として，“一回”（李直 1920:33）をあげている。しかしながら，“他一回遇著他的仇敵”（彼は一度偶然にも彼の敵に出くわした。 李直 1920:33）という例で，補語の典型的な語順，つまり述語の後に補語がつくものではない。李直は感嘆符の説明の中で，“很有趣！我到外邊走了一回。”（面白い！私は外を一度歩いた。 李直 1920:56）という数量補語を使用した例を挙げている。ただ，数量補語自体には言及がないので，実際にどのように李直が数量補語を考えていたのかは分からない。

馬繼楨は未来を表す副詞の中で“一會兒”という例語をあげ，“等一會兒。”（しばらく待つ。 馬繼楨 1920:40）という例を挙げている。ほかの例がないので断定はできないが，馬繼楨は数量補語を副詞と考えたようだ。

楊樹達は数を表す副詞で“你再走一趟罷”（もう一度行って下さい。）、“你要努力一番，才得有進步”（あなたは一度努力をして，ようやく進歩が得られる。 いずれも楊樹達 1920:55）という例を挙げ，“再”“一趟”“一番”が数量を表す副詞だとしている。楊樹達は数量補語を副詞と考えていたようである。

王應偉は複文の説明で“他伸出手來，在腰間摸了半天。”（彼は手を伸ばして，腰を長いことさすっていた。 王應偉 1921:下編第4篇109）という例を挙げている。し

かし，“伸出手來”はさする方法を表している」（王應偉 1921:下編第4篇109）と述べており，数量補語についての言及はない。王應偉が数量補語をどのように考えていたのかは定かではない。

孫俚工は動詞の未来の時制について述べる中で“若過了三天，你還沒有做完你不用來見我了。”（もし三日間過ぎても，やり終えていないなら私に会いに来る必要はありません。 孫俚工 1921:55）という例を挙げている。しかしながら，数量補語の説明はここではされていない。孫俚工が数量補語をどのように考えていたのかについては窺い知ることができない。

爾霖は複文の説明で“今天早晨我看了一回報（以下略）”（今朝私は新聞を一度読み， 爾霖 1921:80）という例文を挙げている。しかしながら，数量補語については特に説明を加えていない。このため，爾霖も数量補語をどのように考えていたのか定かではない。

許地山は数量補語を用いた例として，“我在廣東只遇過一次兵變。”（私は広州でクーデターに一度遭遇したことがある。 許地山 1921:37）を挙げている。これは数量副詞の説明がされている。用例が少ないので断定はできないが，許地山は数量補語を副詞と考えていた可能性がある。

許慕義は数詞の説明で，数量補語を指して，「複合数詞」と呼んでいる。この数量補語の働きは「物事の回数や量を表す。」（許慕義 1921:下編6）と述べ，“來過三回了。”（三回来たことがある。 許慕義 1921:下編6）という例を挙げている。許慕義は数量補語を数詞の一つと考えていたようだ。

黎錦熙は数量副詞の中で“一次”“一趟”“一回”“一番”“一度”“一遍”という語を挙げている。ここでは“常附動詞後”（動詞の後につく 黎錦熙 1924:180）と説明をしており，数量補語を副詞と考えた事が窺える。

数量補語について初期白話文法群がどのように記述してきたのかを見てきた。副詞もしくは数詞と考えていたことが窺える。しかし，数量補語が使われた用例があるというだけで，数量補語についての説明がないため，初期白話文法群が数量補語をどのように考えていたのかについては不明な点が多い。

#### 4.6. 状態補語

状態補語は“他唱歌唱得很好。”（彼は歌を歌うのが上手だ。 刘月华等 2019:595）の“很好”のように，動作行為の状態や様相を表す補語である。では，初期白話文法群では状態補語をどのように記述してきたのであろうか。

呂雲彪らは程度副詞“很”についての例で“這句話，說得很有趣。”（この話はとても興味深い。）、“這齣戲，做得很好。”（この劇はとてもよい。いずれも呂雲彪ら 1920：88）という例を挙げている。状態補語自体の記述はないが、いずれも状態補語をつくる“得”の後にあることから、“得”の必要性には気が付いていたのではないだろうか。

陳浚介は補足語の説明で「副詞が補足語として使われる例」として“鳥兒叫得好聽。”（鳥がきれいな声で鳴いている。陳浚介 1920：23）という例を挙げている。また、「時間に関する副詞」の例として“今天他起得很早”（今日彼は早く起きた。陳浚介 1920：36）という例を挙げている。さらに、単文の構造を説明する中で、“他的白色的馬跑得快。”（彼の白い馬は走るのが速い。陳浚介 1920：57）という例を挙げ、その説明として、「“快”は副詞で、述語“跑得”を修飾している。」（陳浚介 1920：57）と述べている。これらの記述から陳浚介は状態補語を副詞と考えていることが窺える。

李直は感嘆符の説明で“這花開得好看極了！”<sup>[11]</sup>（この花はなんてきれいに咲いたのだ！李直 1920：88）という例で状態補語を使用した例を挙げている。しかし、状態補語について述べているわけではない。つまり、李直が状態補語をどのように考えていたかについては不明である。

馬繼楨は逆接を表す接続詞“雖然”の例として、“這隻帆船，遇了順風，雖然走的很快。但要比那火輪船，還差的遠哩。”（この帆船は追い風に遭った。動きが速いが、あの汽船と比べればまだまだだ。馬繼楨 1920：70）という例を挙げている。ここでは接続詞について述べているばかりで、状態補語についての言及はない。馬繼楨が状態補語をどのように考えたかは窺い知ることができない。

王應偉は自動詞の説明で、“睡得很早。”（寝るのが早い。王應偉 1920：上編第1篇27）という例を挙げている。また、時間を表す副詞の説明で“來得恰好。”（上手い具合に来た。王應偉 1920：上編第1篇44）という例を挙げている。しかし、このほかに状態補語について述べているところはないようである。王應偉は状態補語を副詞と考えていたようだが、用例の説明がないため断定しがたい。

孫俚工は前述したが、「自動詞の後に“得”があると、その後に副詞をつけ、主語—動詞（得）—副詞。という語順になる。孫俚工 1921：73」と述べている。そして、程度補語の“他急得要死。”（彼は非常に焦っていた。）と同列に、“他走得快”（彼は歩くのが速い。）“你說得好”（あ

なたは話すのが上手い。）“這枝花開得好看”（この花はきれいに咲いた。）と状態補語の例を挙げている。つまり、孫俚工は状態補語を程度補語と同じく副詞として考えたのである。

爾霖は述語に“的”あるいは“得”を加えさらに修飾語とするものという例で、“高球踢得幾脚好氣球”（高球は蹴鞠が上手だ 爾霖 1921：72）などのような例を『水滸伝』や『石頭記』から挙げている。爾霖は状態補語を副詞の一種と考えていたようだ。

許地山は同動詞の説明で「同動詞の後ろに副詞がある場合にはその動詞の後ろに“得”を加えなければならない。（許地山 1921：34）」と述べている。また、副詞の文中での位置についての説明で動詞の後に置かれる副詞について“團圓底月把紙窗映得很亮”（まるまるとした月が障子を明るく照らしている。許地山 1921：38）と述べており、様態補語を副詞と考えているようである。

許慕義は目的語の省略についての説明で、“我今天吃得很多了。”（私は今日たくさん食べた。許慕義 1921：下編45）という例をあげ、目的語が省略されていることを説明している。しかし、状態補語自体は説明がなされていない。許慕義は状態補語をどのように考えたのかは定かではない。

黎錦熙は副詞について述べる中で、“這個歌詞做得狠不錯，唱的唱得更好聽”（この歌の歌詞は非常によく、歌手が歌うとさらに耳にこちち良い。黎錦熙 1924：174）という例を挙げ、「もし述語の後につけようとするのであれば，“得”（習慣的に“的”を使う事もある）を副詞の前につけ、修飾語と繋げる。」（黎錦熙 1924：174）と述べている。黎錦熙は程度補語を副詞と考えていたことが分かる。

初期白話文法群が状態補語をどのように記述してきたのかを見てきた。状態補語を使用した例文は多くあるが、状態補語について言及されていることは少なかった。しかし、言及されているところから考えるに、初期白話文法群は状態補語を副詞の一種と考えていたようである。

## 5. おわりに

初期白話文法群が補語や補足語、また、現在の中国語で補語とされる語をどのように記述してきたのかを見てきた。初期白話文法群は補足語を英語の補語と同じように考えるものが多くあった。また、程度補語や状態補語が述語の後にあり、副詞として用いられると考えていたことから英語の副詞をイメージして記述をしたのではないかと想像される。つまり、初期白話文法群の中で英語文法は一定の影響力があつたと思われる。

しかしながら、結果補語や方向補語、また可能補語についても初期白話文法群の中で、それぞれの考え方があり、違いが存在した。このことからすると、龔千炎 1997 が西洋文法の模倣と評したのは、正確ではないといわざるを得ない。

初期白話文法群と現在の中国語の補語の定義は異なる点が多く存在する。また、現在のような補語の認識がいつ頃からなされるのか、今後の課題としたい。

## 注

- [1] 中国語の邦訳は特に断りが無い限り、執筆者による。
- [2] 中国語の補語については若干の異同がある。例えば、大内田三郎 2000『中国語文法参考書』では動作量に関する動量補語、時間量に関する時量補語、比較の結果を表す数量補語に分類をしている。また、太田辰夫 1958/2013『中国語歴史文法』“我沒有書念。”（私はよむ本がない）“你有家回去”（きみには歸る家がある）（いずれも太田 2013：396）ではこれらの補語を形容補語としている。また、状態補語は様態補語と呼ばれることもある。
- [3] 中国語は動詞のほか、形容詞や一部の名詞なども述語となる事ができる。形容詞述語文とは形容詞が述語となる文を指す。
- [4] 動作を伴わない動詞のことで、“是”（～である）“有”（～がある）“爲”（～とみなす）などの動詞を指す。
- [5] “于”については結果補語ではなく刘月华等 2019：623 のように介詞句補語とする説も存在する。
- [6] 陳浚介の考え方は刘月华等 2019：623 のように介詞句を補語とする説に通じるところがありそうだが、この点については今後の課題としたい。
- [7] 結果補語“開”については、刘月华等 2019 のように方向補語とする説もある。
- [8] 呂雲彪らは“詰難狀詞”（詰問副詞）という箇所では“為什麼”を扱っている。
- [9] 副加詞とは動詞や形容詞を修飾し、動作の程度や形容の程度を表すもの（蔡曉舟 1920：25）と定義している。
- [10] 原文は“普通話”。しかし、現在中国で使用されている“普通話”とは文脈から見て違うようだ。おそらくある一定の地域で話されている共通語という意味だと思われる。
- [11] “好看極了”の“極了”は程度補語に分類されるが、ここでは、状態補語の中で使用されているので、本稿では状態補語として考える。

## 参考文献

- 龔千炎 1997《中国语法学史》。语文出版社。
- 刘月华・潘文娛・故韡 2019《实用现代汉语语法》第三版。商务印书馆。
- 興水優・島田亜実 2009『中国語わかる文法』。大修館書店。
- 大内田三郎 2000『中国語文法参考書』。駿河台出版社。
- 太田辰夫 1958/2013『中国語歴史文法』。朋友書店。
- 文部科学省 2018『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 外国語活動・外国語編』開隆堂出版。
- 文部科学省 2018『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 外国語編』開隆堂出版。
- 文部科学省 2019『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説 外国語編 英語編』開隆堂出版。
- 田村新 2009「1920 年代前半における中国語白話文法研究について」、首都大学東京都市教養学部人文・社会系『人文学報』418:1-18 頁。
- 田村新 2020「清末民初における「助動詞」の範疇について」、首都大学東京人文科学研究科『人文学報』516-12:1-18 頁。